

芥川龍之介

三つの窓





# 三つの窓



一  
鼠

一等戦闘艦××の横須賀軍港へはいったのは六月には  
いったばかりだった。軍港を囲んだ山々はどれも皆雨の  
ために煙っていた。元来軍艦は碇泊ていはくしたが最後、鼠の殖  
なかつたと云うためしはない。——××も亦同じことだ  
った。長雨ながあめの中に旗を垂らした二万噸の××の甲板の下  
にも鼠はいつか手箱だの衣い囊のうだのにもつきはじめた。

こう云う鼠を狩る為に鼠を一匹捉えたものには一日の上陸を許すと云う副長の命令の下つたのは碇泊後三日みっかにならない頃だった。勿論水兵や機関兵はこの命令の下つた時から熱心に鼠狩りにとりかかった。鼠は彼等の力の為に見る見る数を減すうらして行つた。従つて彼等は一匹の鼠も争わない訣には行かなかつた。

「この頃みんなの持つて来る鼠は大抵八つ裂きになつてゐるぜ。寄つてたかつて引っぱり合うものだから。」

ガンルウムに集つた将校たちはこんなことを話して笑つたりした。少年らしい顔をしたA中尉もやはり彼等の

一人だった。つゆ空に近い人生はのんびりと育ったA中尉にはほんとうには何もわからなかった。が、水兵や機関兵の上陸したがる心もちが彼にもはつきりわかっていた。A中尉は巻煙草をふかしながら、彼等の話にまじる時にはいつもこう云う返事をしていた。

「そうだろうな。おれでも八つ裂きにし兼ねないから。」  
彼の言葉は独身者どくしんものの彼だけに言われるのに違いなかった。彼の友達のY中尉は一年ほど前に妻帯していた為に大抵水兵や機関兵の上にわざと冷笑を浴びせていた。それは又何ごとにも容易に弱みを見せまいとするふだんの

彼の態度にも合あ合あしていることは確かだった。褐色の口髭の短い彼は一杯の麦酒ビールに酔った時さえ、テエブルの上に頬杖をつき、時々A中尉にこう言ったりしていた。

「どうだ、おれたちも鼠狩をしては？」

或雨の晴れ上った朝、甲板かんぱん士官だったA中尉はSと云う水兵に上陸を許可した。それは彼の小鼠を一匹、——しかも五体ごたいの整った小鼠を一匹とった為だった。人一倍体の逞たくましいSは珍しい日の光を浴びたまま、幅の狭い舷梯げんていを下って行った。すると仲間の水兵が一人身軽に舷梯を登りながら、丁度彼とすれ違ちがう拍子に常談のように



彼に声をかけた。

「おい、輸入か？」

「うん、輸入だ。」

彼等の問答はA中尉の耳にはいらずにはいなかった。

彼はSを呼び戻し、甲板の上に立たせたまま、彼等の問答の意味を尋ね出した。

「輸入とは何か？」

Sはちゃんと直立し、A中尉の顔を見ていたものの、明らかにしよげ切っているらしかった。

「輸入とは外から持って来たものであります。」

「何のために外から持って来たか？」

A 中尉は勿論何の為に持って来たかを承知していた。が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々いまいましさを感じ、力一ぱい彼の頬を擲なぐりつけた。Sはちよつとよろめいたものの、すぐにまた不動の姿勢をした。

「誰が外から持って来たか？」

Sは又何とも答えなかつた。A中尉は彼を見つめながら、もう一度彼の横顔を張りつける場合を想像していた。

「誰だ？」

「わたくしの家内にあります。」

「面会に来たときに持って来たのか？」

「はい。」

A 中尉は何か心の中に微笑しずにはいられなかった。

「何に入れて持って来たか？」

「菓子折に入れて持って来ました。」

「お前の家うちはどこにあるのか？」

「平坂下ひらさかしたであります。」

「お前の親は達者でいるか？」

「いえ、家内と二人暮らしであります。」

「子供はないのか？」

「はい。」

Sはこう云う問答の中も不安らしい容子を改めなかつた。A中尉は彼を立たせて措いたまま、ちよつと横須賀の町へ目を移した。横須賀の町は山々の中にもごみごみと屋根を積み上げていた。それは日の光を浴びていたものの、妙に見すばらしい景色だった。

「お前の上陸は許可しないぞ。」

「はい。」

SはA中尉の黙っているのを見、どうしようかと迷っているらしかった。が、A中尉は次に命令する言葉を心

の中に用意していた。が、暫く何も言わずに甲板の上を歩いていた。「こいつは罰を受けるのを恐れている。」——そんな気もあらゆる上官のようにA中尉には愉快でないことはなかった。

「もう善い。あっちへ行け。」

A中尉はやつとこう言った。Sは挙手の礼をした後、くるりと彼に後ろを向け、ハッチの方へ歩いて行こうとした。彼は微笑しないように努力しながら、Sの五六歩隔った後、俄かに又「おい待て」と声をかけた。

「はい。」

Sは咄嗟にふり返った。が、不安はもう一度体中に漲みなぎって来たらしかった。

「お前に言いつける用がある。平坂下にはクラツカアを売っている店があるな？」

「はい。」

「あのクラツカアを一袋買って来い。」

「今でありますか？」

「そうだ。今すぐに。」

A中尉は日に焼けたSの頬に涙の流れるのを見のがさなかつた。――

それから二三日たった後、<sup>のち</sup>A中尉はガンルウムのテエブルに女名前の手紙に目を通していた。手紙は桃色の書簡箋に覚束ないペンの字を並べたものだった。彼は一通り読んでしまうと、一本の巻煙草に火をつけながら、ちようど前にいたY中尉にこの手紙を投げ渡した。

「何だ、これは？ …… 『昨日のことは夫の罪にてはこれなく無之、皆浅はかなるわたくしの心より起りしこと故、何とぞ不悪御ゆるし下され度候。 …… 尚又御志おこころざしのほどは後のちのちまでも忘れまじく』 ……」

Y中尉は手紙を持ったまま、だんだん軽蔑の色を浮べ

出した。それから無愛想にA中尉の顔を見、冷かすように話しかけた。

「善根ぜんこんを積んだと云う気がするだろう？」

「ふん、多少しないこともない。」

A中尉は軽がると受け流したまま、円窓の外を眺めていた。円窓の外に見えるのは雨あしの長い海ばかりだった。しかし彼は暫くすると、俄かに何かに羞じるようにこうY中尉に声をかけた。

「けれども妙に寂しいんだがね。あいつのビンを張った時には可哀そうだとも何とも思わなかった癖に。……」



Y中尉はちよつと疑惑とも躊躇ともつかない表情を示した。それから何とも返事をしずくにテエブルの上の新聞を読みはじめた。ガンルウムの中には二人の外に丁度誰もい合わせなかつた。が、テエブルの上のコップにはセロリイが何本もさしてあつた。A中尉もこの水々しいセロリイの葉を眺めたまま、やはり巻煙草ばかりふかしていた。こう云う素っ気ないY中尉に不思議にも親しみを感じながら。………

## 二 三人

一等戦闘艦××は或海戦を終った後、<sup>のち</sup>五隻の軍艦を従えながら、静かに鎮海湾<sup>ちんかいわん</sup>へ向って行った。海はいつか夜になっていた。が、左舷<sup>さげん</sup>の水平線の上には大きい鎌なりの月が一つ赤あかと空にかかっていた。二万噸の××の中は勿論まだ落ち着かなかつた。しかしそれは勝利の後だけに活き活きとしていることは確かだった。唯小心者のK中尉だけはこう云う中にも疲れ切った顔をしながら、何か用を見つけてはわざとそこそこを歩きまわって

いた。

この海戦の始まる前夜、彼は甲板を歩いているうちに、かすかな角燈の光を見つけ、そつとそこへ歩いて行った。するとそこには年の若い軍楽隊の楽手ががくしゆ一人甲板の上にあぐらをかいて、敵の目を避けた角燈の光に聖書を読んでいたのであった。K中尉は何か感動し、この楽手に優しい言葉をかけた。楽手はちよいと驚いたらしかった。が、相手の上官の小言をこごと言わないことを発見すると、忽ち女らしい微笑を浮かべ、怯おず怯ず彼の言葉に答え出した。……しかしその若い楽手ももう今ではメエン・マストの

根もとに中<sup>あた</sup>った砲弾の為に死骸になつて横になつていた。K中尉は彼の死骸を見た時、俄かに「死は人をして静かならしむ」と云う文章を思い出した。もしK中尉自身も砲弾の為に咄嗟に命を失っていたとすれば、——それは彼にはどう云う死よりも幸福のように思われるのだつた。

けれどもこの海戦の前の出来事は感じ易いK中尉の心に未だにはつきり残っていた。戦鬪準備を整えた一等戦鬪艦××はやはり五隻の軍艦を従え、浪の高い海を進んで行つた。すると右舷<sup>うげん</sup>の大砲が一門なぜか蓋<sup>ふた</sup>を開かなか

った。しかももう水平線には敵の艦隊の挙げる煙も幾すじかかすかにたなびいていた。この手ぬかりを見た水兵たちの一人は砲身の上へ跨るが早いか、身軽に砲口まで腹這って行き、両足で蓋を押しあげようとした。しかし蓋をあけることは存外容易には出来ないらしかった。水兵は海を下にしたまま、何度も両足をあかくようにしていた。が、時々顔を挙げては白い歯を見せて笑ったりもしていた。そのうちに××は大うねりに進路を右へ曲げはじめた。同時に又海は右舷全体へ凄まじい浪を浴びせかけた。それは勿論あつと言う間に大砲に跨った水兵の

姿をさらってしまふのに足るものだった。海の中に落ちた水兵は一生懸命に片手を挙げ、何かおお声に叫んでいった。ブイは水兵たちの罵る声と一しよに海の上へ飛んで行った。しかし勿論××は敵の艦隊を前にした以上、ボルトをおろす訣には行かなかった。水兵はブイにとりついたものの、見る見る遠ざかるばかりだった。彼の運命は遅かれ早かれ溺死するのに定まっていた。のみならずふか鱧はこの海にも決して少いとは言われなかった。……

若い楽手の戦死に対するK中尉の心もちはこの海戦の前の出来事の記憶と対照を作らずにいる訣はなかった。

彼は兵学校へはいったものの、いつか一度は自然主義の作家になることを空想していた。のみならず兵学校を卒業してからもモオパスサンの小説などを愛読していた。人生はこう云うK中尉には薄暗い一面を示し勝ちだった。彼は××に乗り組んだ後、エジプトの石棺せつかんに書いてあった「人生——戦闘」と云う言葉を思い出し、××の将校や下士卒は勿論、××そのものこそ言葉通りにエジプト人の格言を鋼鉄に組み上げていると思ったりした。従って楽手の死骸の前には何かあらゆる戦いを終った静かさを感じずにはいられなかった。しかしあの水兵のよ

うにどこまでも生きようとする苦しさもたまらないと思わずにはいられなかった。

K中尉は額の汗を拭きながら、せめては風にでも吹かれる為に後部甲板のハッチを登って行った。すると十二吋インチの砲塔ほうとうの前に綺麗に顔を剃った甲板士官が一人両手を後ろに組んだまま、ぶらぶら甲板を歩いていた。その又前には下士かしが一人頬骨の高い顔を半ば俯向うつむけ、砲塔を後ろに直立していた。K中尉はちよつと不快になり、そわそわ甲板士官の側へ歩み寄った。

「どうしたんだ？」



「何、副長の点検前に便所へはいつていたもんだから。」  
それは勿論軍艦の中では余り珍らしくない出来事だった。K中尉はそこに腰をおろし、スタンションを取り払った左舷の海や赤い鎌なりの月を眺め出した。あたりは甲板士官の靴の音のほかには人声も何も聞えなかった。K中尉は幾分か気安さを感じ、やっときょうの海戦中の心もちなどを思い出していた。

「もう一度わたくしはお願い致します。善行賞はお取り上げになっても仕かたはありません。」

下士は俄に顔を挙げ、こう甲板士官に話しかけた。K

中尉は思わず彼を見上げ、薄暗い彼の顔の上に何か真剣な表情を感じた。しかし快活な甲板士官はやはり両手を組んだまま、静かに甲板を歩きつづけていた。

「莫迦なことを言うな。」

「けれどもここに起立してはわたくしの部下に顔も合わされません。進級の遅れるのも覚悟しております。」

「進級の遅れるのは一大事だ。それよりそこに起立していろ。」

甲板士官はこう言った後、<sup>のち</sup>気軽に又甲板を歩きはじめた。K中尉も理智的には甲板士官に同意見だった。のみ

ならずこの下士の名誉心を感傷的と思う気もちもない訣わけではなかった。が、じつと頭を垂れた下士は妙にK中尉を不安にした。

「ここに起立しているのは恥辱であります。」  
下士は低い声に頼みつづけた。

「それはお前の招いたことだ。」

「罰は甘んじて受けるつもりであります。ただどうか起立していることは……」

「唯恥辱と云う立てまえから見れば、どちらとも畢竟同じことじゃないか？」

「しかし部下に威厳を失うのはわたくしとしては苦しいのであります。」

甲板士官は何とも答えなかった。下士は、——下士もあきらめたと見え、「あります」に力を入れたぎり、一言も言わずに佇んでいた。K中尉はだんだん不安になり、（しかも又一面にはこの下士の感傷主義に欺だまされまいと云う気もない訣ではなかった。）何か彼の為に言っただりたいたいを感じた。しかしその「何か」も口を出した時は特色のない言葉に変わっていた。

「静かだな。」

「うん。」

甲板士官はこう答えたなり、今度は顔をなでて歩いてきた。海戦の前夜にK中尉に「昔、木村重成きむらしげなりは……」などと言い、特に叮嚀に剃っていた顔を……

この下士は罰をすました後のち、いつか行方不明になってしまった。が、投身することは勿論当直のある限りは絶対に出来ないので違いなかった。のみならず自殺の行われ易い石炭庫の中にもいないことは半日とたたないうちに明かになった。しかし彼の行方不明になったことは確かに彼の死んだことだった。彼は母や弟にそれぞれ遺書

を残していた。彼に罰を加えた甲板士官は誰の目にも落ち着かなかつた。K中尉は小心ものだけに人一倍彼に同情し、K中尉自身の飲まない麦酒ビールを何杯も強しいずにはいられなかつた。が、同時に又相手の酔うことを心配しずにもいられなかつた。

「何しろあいつは意地っぱりだったからなあ。しかし死ななくつても善いじゃないか？——」

相手は椅子からずり落ちかかつたなり、何度もこんな愚痴を繰り返していた。

「おれはただ立っていると言っただけなんだ。それを何

も死ななくったって、……」

××の鎮海湾へ碇泊ていはくした後、煙突のちの掃除にはいった機  
関兵は偶然この下士を発見した。彼は煙突の中に垂れた  
一すじの鎖に縊死いししていた。が、彼の水兵服は勿論、皮  
や肉も焼け落ちたために下っているのは骸骨だけだっ  
た。こう云う話はガンルウムにいたK中尉にも伝わらな  
い訣はなかった。彼はこの下士の砲塔の前に佇んでいた  
姿を思い出し、まだどこかに赤い月の鎌なりにかかつて  
いるように感じた。

この三人の死はK中尉の心にいつまでも暗い影を投げ

ていた。彼はいつか彼等の中に人生全体さえ感じ出した。しかし年月ねんげつはこの厭世主義者えんせいをいつか部内でも評判の善い海軍少将の一人に数えはじめた。彼は揮毫きごうを勧められ、滅多に筆をとり上げたことはなかった。が、やむを得ない場合だけは必ず画帖がじょうなどにこう書いていた。

君きみ看みよ双そう眼がん色いろ  
 不かたらざればうれいなきににたり語かたらざればうれいなきににたり似かたらざればうれいなきににたり無かたらざればうれいなきににたり愁かたらざればうれいなきににたり



## 三 一等戦闘艦 × ×

一等戦闘艦 × × は横須賀軍港のドックにはいることになつた。修繕工事は容易に捗<sup>はか</sup>どらなかつた。二万噸の × × は高い両舷の内外に無数の職工をかからせたまま、何度もいつにない苛<sup>か</sup>立たしさを感じた。が、海に浮かんでゐることも蠣<sup>かき</sup>にとりつかれることを思えば、むず痒<sup>がゆ</sup>い気もするの<sup>に</sup>違<sup>い</sup>なかつた。

横須賀軍港には × × の友だちの △ △ も碇泊していた。一万二千噸の △ △ は × × よりも年の若い軍艦だつた。彼

等は広い海越しに時々声のない話をした。△△は××の年齢には勿論、造船技師の手落ちから舵かじの狂い易いことに同情していた。が、××をいたわるために一度もそんな問題を話し合ったことはなかった。のみならず何度も海戦をして来た××に対する尊敬の為にいつも敬語を用いていた。

すると或曇った午後、△△は火薬庫に火のはいったために俄かに恐しい爆声を挙げ、半ば海中に横になってしまった。××は勿論びっくりした。(もつとも大勢の職工たちはこの××の震えたのを物理的に解釈したのに違

いなかっただ。海戦もしない△△の急に片輪になつてしまふ、——それは実際××には殆ど信じられない位だつた。彼は努めて驚きを隠し、はるかに△△を励したりした。が、△△は傾いたまま、炎や煙の立ち昇る中に唯唸り声を立てるだけだつた。

それから三四日たった後、二万噸の××は両舷の水圧を失つていたためだんだん甲板も乾割ひわれはじめた。この容子を見た職工たちは愈いよいよ修繕工事を急ぎ出した。が、××はいつの間にか彼自身を見離していた。△△はまだ年も若いのに目の前の海に沈んでしまった。こう云う△

△の運命を思えば、彼の生涯は少くとも喜びや苦しみを嘗め尽していた。××はもう昔になったある海戦の時に思い出した。それは旗もずたずたに裂ければ、マストさえ折れてしまう海戦だった。……

二万噸の××は白じらと乾いたドックの中に高だかど艦首を擡もたげていた。彼の前には巡洋艦や駆逐艇が何隻も出しゅつ入にゅうしていた。それから新らしい潜航艇や水上飛行機も見えないことはなかった。しかしそれ等は××には果なさを感じさせるばかりだった。××は照ったり曇ったりする横須賀軍港を見渡したまま、じつと彼の運命を

待ちつづけていた。その間<sup>あいだ</sup>もやはりおのずから甲板の  
じりじり反り返って来るのに幾分か不安を感じながら。  
……

(昭和二年六月十日)



日本文学電子図書館

---

「或阿呆の一生・歯車」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和41年4月30日 17版発行

---



日本文学電子図書館